

提言

「今の私」

私が平和活動に携わるきっかけとなったのは、小学4年生の頃から行っている解放子ども会の学習会です。私は、そこで気づく力をつけました。学習会の中で一番に残っているのは、石川一雄さんとの出会いです。狭山事件により何の関係もない石川さんは逮捕され、厳しい取り調べを受け、自白をさせられました。そこには、被差別部落の人ならしかねないという石川さんに対する差別が根底にありました。狭山現地調査では、石川さんのその自白通りにフィールドワークをしておかしな点に多く気づきました。石川さんと早智子さんにも話を伺いました。石川さんは家が貧しくてお金がなく、学校に行けなかったと語っておられました。しかし、自分の無実を訴えるために、毎日一万字の漢字を練習してきたとおっしゃっていました。そして、石川さんは私たちに「無実を訴えて下さい。」とは決して言いませんでした。私たちに「勉強す



第23代高校生平和大使
大津高等学校2年

水上 真菜 さん

の言葉で伝えることの大切さを感じました。

戦争と差別はつながっていると思います。長崎の修学旅行で中村由一さんの話を聞いた中でも原爆を受けた人に差別をする人たちがいました。私はその話を聞いたときに、戦争中にも原爆を受けた人に対する差別があったことに驚きました。誰もが戦争で心がとれてしまうのに、そんな中に差別があったのは信じられません。でも、戦争に差別があったことから目を背けてはいけません。二度と戦争を起こさないために、そして差別がうまれな

いなく、その中の差別も学びながら訴えていきます。

私は中学生の頃、韓国に行き、日本大使館前で若い女性たちが座り込みをしていた姿を見ました。その座り込みは戦争によって傷ついた従軍慰安婦について訴えるものでした。女性たちの強い思いをこ

めた言葉や姿勢に心を打たれ、同時にハッとさせられました。日本では、私を含め若い人たちが戦争のことを話題にすることもなく忘れられてきているように思います。そんな時に私は自分の祖父と祖母が心に浮かびました。八月になると戦争の体験を話してくれた祖母は戦争で父を二歳で亡くしていま

す。祖父は、四歳の時、アメリカ軍のグラマンから機銃掃射を受け、夜道を必死に走って逃げたことをよく話してくれました。話を聞くたびに、戦争は二度とあってはならないこと、この話を語り継いでいく責任が私にはあると思いました。また、現地に行つて学ぶことの大切さを感じています。今年の八月九日は、長崎で迎えました。初めて平和式典に参列させていただき、熱線や爆風を受け叫び声をあげながら亡くなる人々が目に浮かび、涙が出ました。また、被爆された方々が思い出したくないことでありながらも私たちに伝えてく

ださるのは、これから誰にも二度と同じ思いをしてほしくないと思うからこそ、語り継いでくださっていると思います。

だからこそ、被爆者の方々の願いも私たちが伝えていかなければならないと思います。他人事ではなく、自分と重ねて考えられるような言葉で伝えていけるように自分と向き合つて考えていきます。

今年は戦後七十五年となり、戦争を体験した方から話を聞くことができます。最後の世代となつてきています。戦争、被爆の本当の恐ろしさ、平和の尊さを知り、伝えていくのは私たち若い世代にかかっていると強く感じます。長崎で学んだことを自分の言葉で、高校生や中学生といった同じ世代の人たちへ伝えていきます。自分の言葉で伝えること、本当に伝わる言葉を自分で考え、私の力は小さなものだとしても一人でも多くの人に立ち止まって考える機会ができるように行動していきます。